

る。其の後右御長刀の鞘御改被成、重々上箱へ入れ、莖入に被仰付、其の上にしめ繩を御はらせ、薪丸の御土藏へ御納めに成りたり。其の頃古き鞘をば本阿彌光甫拜領仕度旨相願ひ、則ち被下けるに、或時疫病のやう成る煩はやり、本阿彌家の者共の内にも數人煩ひける處、右小鍛冶の御長刀の古鞘を載かせ候へば、忽ち本復いたしたる由にて、本阿彌家の者共殊の外驚きけるよし、享保四年十月九日御意也と。又混見摘寫に、微妙公夫れ、箱へ寄せ置きたる正宗等の重器の刀劍を、本阿彌光甫に手入方命ぜられし處、正宗の箱の内に當麻の腰物を入れ置かれたるを、光甫見て、是は御家に隠なき當麻の御腰物なり。然るを正宗の箱へ入れ置かせらるゝは、利常卿の御眼力つよきゆゑ也。必ず正宗に可成物と思召しての事なるべし。劔を情に入れ磨き候はゞ定めて正宗に成るべく、預り申し度しと願ふ。老中詮議の上光甫へ渡されしに、請取り京都へ歸り、種々工夫して磨き上げ、江戸の家元へ極めに造しけるに、遂に正宗正身なりと極り、御家へ上げりといふ事を載せたり。按ずるに、右は無銘物なるゆゑにかゝる事もありたるなるべし。

是等の傳話どもにても、利常卿薨逝後金澤へ毎々下向し、刀劍の手入方を命ぜられし事知られける。但し金澤の邸宅は金澤寓居の爲に賜はりたるなるべし。

○吉田孫助蕃邸

延寶の金澤圖に、本阿彌光甫居邸の向ひ、西側の邸地を吉田孫助と記載す。此の邸宅は、尻地は南町の町屋なり。漸得雜記にも、吉田孫介の宅は金澤南町の後にありて、内に的場を構へたりとあり。又元祿六年の士帳に、吉田八平千石町とあり。八平は孫助の嗣子也。

○吉田孫助邸宅奇談

咄隨筆に云ふ。吉田孫介に子息三人あり。嫡男大學、次男八平、三男丹彌之助と云ふ。何れも吉田家の射藝に達しける。延寶・天和の頃にや、某年五月晦日孫介は泊番にて留守なりければ、太田小兵衛といふ鞘細工人來りて、碁を打ちて慰み居ける。夜半過の頃、孫介の母儀の寢屋に入音する。丹彌之助無心元とて行きて祖母に問ふ。祖母打腹立て、いかに其の方共我を括りて、先程より來りて年寄りたる者をなぶりて慰むぞとあれば、丹彌之助、いや誰も參

らず候に、人音仕るゆゑ無心元存じ御尋ね申也。頃日此の邊に化者ありと世上に申す。狐・貉の仕業にて御座有るべし。今夜ねらひ打殺し候べしとて、表へ出で此の事を語れば、人々大きに笑ひ、何しにかゝる事の有るべきとて、其の夜は碁にて済みにける。翌日孫助歸りしに、太田小兵衛此の事を語る。孫介大きに怒つて、さやうのあやしき者を我が屋へ入るゝ事、吉田の家の耻辱なり。汝等是を不射して、碁を打ち遊び居る事沙汰の限り也。今夜射留めずば、汝等を我射殺すべしと、父の言葉の重ければ、氷室の水しみかへりたる有様なり。太田小兵衛は歸りにける。丹彌之助舍兄達に向ひ、今日川狩の備有りといへども、父の命の重きに依つて川狩を止め、彼の變化を射留むべしとて、夜に入るをぞ待ちにける。兄大學は筆を取つて矢に各々の名を記す。甲乙を見んどの爲なるべし。吉田氏の宅は南町のうしろ、堂形前にあり。内に的場を構へ、的場の砌其の頃はむくげ垣にてありしかや。此の所に壁木舞のこわれたるを取集め、其の陰に三人隠れ居ける。亥の刻過ぐれども來らず。大學退屈してたばこをのみ、暫く休息せんとも也。

丹彌之助押留め、今少しの内こらへ給へ、今にも來るべしといふ程こそあれ、何かは知らず三尺餘の火の玉むくげの陰より出づると見ね、梁の上へ登る所を、一番に丹彌之助、二番に大學、三番八平、三人共に放つ矢、手ごたへして化生に中る。得たりやおうと懸け付けて、弓にてたゝきふせ打殺す。大きき五尺許の貉の、身には毛一筋もなく、漆にて堅めたる如く也。但し足首より下には毛もありける也。若鷲小者居合はせけれども、兄弟三人して打殺し、父に見せられけり。一の矢丹彌之助、十三歳、貉の吠に立つ所の矢沓巻に至る。二の矢大學、右より左へ射貫く。三の矢八平、胸より尻へ射通すと也。此の事太守公の御聽にも達しけるとぞ。右の貉の皮弓場に懸けて年久しく有りける。東美源内は吉田孫介の弟子にて、其の頃毎度的射に出でしまゝ、見たりと源内委しく物語也。其の頃道眼といふ禪僧、生國紀州の者、江湖頭をも勤めたる由にて諸國を修行せしが、金澤にも暫く居住せり。後能州へゆき、夫れより佐渡へ渡海し住みける。鹽竈の火を燒きて民の助をなす。鹽屋の翁悦びまだ尊敬せり。荻といふ所の庄屋市郎右衛門と云